

うきたむ

第2号

山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館館報

1993. 11. 3

(山形県東置賜郡高島町大字安久津2117 TEL 0238-52-2585)



古代に思いをさせ
縄文月見の宴開かれる

縄文太鼓のリズムに耳かたむけながら (町広報係提供)

悠久の歴史を感じる うきたむ風土記の丘に

本館運営協議会会長

浜田 清明

うきたむ風土記の丘が四月に発足し半年が経過した。この九月には考古資料館の入館者数も一万人を超えたという。

ところでその名称であるが「うきたむ」は山形県置賜地方の原風景を表わす言葉であり「風土記の丘」という呼称は昭和四十一年度に文化庁が風土記の丘設置要項に用いたのに始まる言葉である。要項に示された風土記の丘の目的とは「地方における伝統ある歴史的・風土的特性をあらわす遺跡が数多く存在する地域の広域的保存と環境整備を図り、あわせてこの地域の文化的所産である考古資料・歴史資料等を収蔵展示するための資料館の設置等を行ない、もってこれらの遺跡および資料等の一体的な保存と普及活用を図ること」とされている。

うきたむ風土記の丘の保存ゾーンの区域には縄文草創期の洞窟遺跡である国指定の日向大立、一の沢、火箱岩を始め古墳その他の遺跡が数多く存在した出土品等にも価値の高いものが多い。この風土記の丘に専門性の高い考古資料館が中心的施設として設置されたのも、これらのことを考へてのことであろう。県民が遺跡や考古資料館の展示等に接し悠久の歴史を感じてもらえる「うきたむ風土記の丘」であって欲しい。

古墳と人びとのくらし

第一回企画展開催

企画展示室で第一回企画展「古墳と人々のくらし」が開催中である。開期は十月一日～十一月三十日まで。

日本の国が統一をはじめた四世紀には、畿内から遠くはなれた山形県地方でも前方後方墳や前方後円墳が現われる。これまでも考えられていたよりも、かなり早く農業生産を基盤にして、

豪族が各地に勢力をひろげつつあったことを示している。

「えみし」の住む未開野蠻な地ではなく、日本の国が統一されるころは、この地域も政治的
社会に入り、地域をまとめる首
長層が出現したのである。

長さ九メートルの前方後円墳
墳稲荷森古墳(国指定・南陽市)
をはじめ、七十メートルをこえる

いる。このような最新の成果をもとに、古墳と人びとのくらしに光をあて、東北古代への新たな視点と認識をもって地域の歴史をとらえ直すきっかけとなることをねらいとして開催したのである。

山形にもはにわがある？

会場入口の展示ケースの中に
三点のはにわが並んでいる。いずれも山形市菅沢二号墳から出土したもので、甲冑型・靴型・朝顔型のはにわ。五世紀後半のものであるが、山形県内では数少ない貴重なもので、山形市教育委員会の秘蔵のものである。靴型はにわの完形品は東北地方ではじめて。

くらしを伝える木製品

この度は山形県埋蔵文化財センターの厚意により、珍らしい木製の杵・槌・鋤の先・矢・下駄などが展示されている。天童市西沼田遺跡から出土した古墳時代後期六世紀後半のもので、

いま使用されている道具の原形は、すでにその頃からあったのである。

かまどや食器類などの土器も数多く並べられ、当時のくらしをものがたってくれる。

県内古墳の銅鏡三面

銅鏡は、当時の権力者の象徴として大事な宝器であった。県内からは、山形市お花山古墳群より二面、川西町下小松古墳群より一面発見されているが、それらのすべてが展示されている。これははじめてのことである。

まぼろしの三累環

大刀の柄の先端を飾る環頭のなかに三つの環をつなぎ合せた三累環がある。これは出土例が余り多くない。かつて戦後まもなく高島町安久津古墳群から出土したといわれていたが、このほど現物が見つかり展示されている。

新羅系の遺物で、青銅製、時期は七世紀。今後高島町周辺の末期古墳を考える上で貴重な資料となる。

また明治時代に羽山古墳から出土した曲玉や切子玉・金環などの耳かざり(加藤五右衛門氏蔵)なども公開されている。



悠遠な古代のロマンにふれながら

—縄文月見の宴・土器づくり教室—

いま縄文時代の文化をめぐって、人びとの熱いまなざしが注がれている。日本の基層文化をなす縄文文化に、現代の文明が置きわすれてきたものがひそんでいるからにちがいない。

本館ではこの秋「土器づくり教室」と「縄文月見の宴」を催した。

「縄文土器づくり教室」は、年配の方から小学生もまじえて二五名が参加して、去る九月一二日に開かれた。講師には、米沢成島焼の水野哲さんをお願いし、一人ひとり懇切な指導のもとに縄文土器づくりに挑戦。その日は、午前中縄文の原体づくり、どんな土器を作るか構想し、午後から粘土を使っての製作を行い、夕刻まで全員できあがった。そして一〇月四日に野焼きを行って完成した。一つ一つのすばらしい作品は、いま資料館に展示中である。

また仲秋の満月にあたる九月三〇日夕刻から「縄文月見の宴」が催された。高島町郷土資料館との共催。定員をはるかにこえて、遠く山形・天童・長井などからも六〇名が集まった。

「縄文クッキ」がつくられて、山ぼうしやあけびから縄文酒やジュース、さらに「岩魚」をほうの葉でつつみ焼いた焼き魚などをみんな

で手わけして料理し、六時半から祝宴に入った。残念ながらあいにくの雨のため、館内で実施したが、参加者は古代のロマンに心はずませ、独特の野性味あふれる味に舌つづみをうっていた。つづいて映画「古墳のつくられたころ」を鑑賞し、長井市西根地区の「縄文太鼓」のリズムに酔いながら、宴は九時までつづき、縄文のロマンに魅了された一夜であった。



完成した土器を手にして（町広報係提供）

ニユース・ア・ラ・カルト

運営協議会開かれる

本館の運営や資料の収集・整備について協議する第一回運営協議会が去る九月二四日に開かれた。

まず七名の学識経験者からなる委員が県教育長より委嘱され、その後会長に浜田清明氏、副会長吉野智雄氏を選任。今後の館運営や資料の整備について協議した。委員の方々のご氏名は次頁に掲げた。

「末期古墳の時代を考える」特別講演会開かれる

第一回企画展「古墳と人びとのくらし」開催にちなんで、さる一〇月九日（土）、福島大学教授工藤雅樹氏を講師に、本館研修室で開催された。岩手・秋田・宮城などの遠方からも集まり、五〇名を越す盛況ぶりであった。末期古墳がつくられた七〜八世紀にこの地域も「えみし」と密接なつながりをもっていたことを資料をあげながら話され、

参加者からいろいろな質問も出されて成功裡に終わった。

冷害にめげず古代米収穫

今年は夏の天候不順により、各地で冷害による減収が心配されている。資料館の裏にある赤米・黒米などの古代米は、その影響をほとんど受けず、例年なみの収穫。

農薬を全く使わず、自然の中で育てられた野性種の強さをあらためて感じさせられた。

一〇月一日に水田の管理をお願いしている土屋徳三郎さんをはじめボランティアが総出で稲刈りが行われて、その後芋煮会が催され、今年の収穫を祝った。

この古代の稲をみるために、遠く酒田からわざわざかけつけた方もおり、多くの人が見学に訪れた。

入館者一万人突破

四月二三日開館以来、一〇月で六ヵ月になるが、去る九月七日で入館者数は一万人を越えた。予想をこえる見学者の数で、最近の考古ブームを反映して順調なスタートとなった。小・中・高校生や、文化財愛好者、史跡めぐりなどの団体が多い。

この一品II

わが館の展示物から

銅鏡三面

古い古墳から出土する銅鏡は葬られた人の権力を象徴する宝器であった。県内の古墳からは全部で三面の鏡が発見されている。

山形市青野お花山古墳群一号墳の振文鏡、同じく二二号墳の乳文鏡、川西町下小松古墳群の小形鋸歯文鏡である。これら三面がこの度展示されている。振文鏡は径九・四五センチ。外区は鋸歯文、より紐を糸でくくったようにみえる振文が並ぶ。これは獸形文の変化したものとされる。

乳文鏡は径八・九五センチ、内区に七個の乳がめぐり、そのまわりを細い線で表わした双脚文様がめぐる。外区には鋸歯文が並んでいる。

小形鋸歯文鏡は径四・九センチと小さく、頂点を中心に向けた三角文が並んでいる。

どの鏡も六世紀前半と推定される古墳から出土したが、製作年代は五世紀後半であろうか。



左2面:お花山古墳出土、右:下小松古墳出土

三角縁神獸鏡などちがって、鏡が古墳へ副葬されることがすたれた時期のものであり、伝統的な行為として群集墳の中の古いものに残ったことを意味している。地域の古墳の特色を示す遺物として重要である。

県内では羽黒山鏡ヶ池から数百年の銅鏡が発見されているが、もっとも古いものが平安時代であるから、この三面の鏡が県内では一番古い。

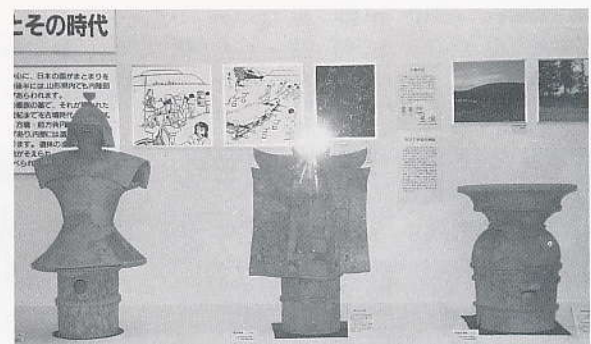
菅沢二号墳のはにわ

この度の企画展「古墳と人びとのくらし」で、三点のはにわ(埴輪)が展示されている。山形市教育委員会保管のものである。甲冑形・靴形・朝顔形で、県内はもとより東北地方でも珍しいものである。

このはにわを出した菅沢二号墳は、山形市街の西部丘陵の突端部にあり、直径五〇メートル高さ六・六メートルの円墳で東北地方の円墳では最大である。二段築成で、まわりには浅い濠がめぐっている。はにわは平らな頂上部の端や下段上面などから多く出ている。

甲冑形にはわは全長一一三センチ、円筒形の台部に草摺・短甲・眉庇付の冑・鍔などもいいねいに表わされている。このような甲冑形にはわは五個体出土している。

靴形にはわは高さ八八・一センチ、弓の矢を入れて背中に背負う靴を表わしたものである。やはり円筒形の台部に、ひれ状に左右にのびる方形の背板をとりつけ、縦長で箱状の矢筒部を接合させている。背板には上下左右に二つずつの同心円文、その中心部を縦に通る沈線とその上に三角文が表現される。この



展示中の菅沢2号墳の埴輪

ような形の靴形にはわは全国的にも珍らしい。

古墳の埋葬部などのまわりに並び立つ円筒形にはわの間に立てられたのが朝顔形はにわである。朝顔の花のように口が外に開く。

これらに類するはにわは、東北地方では初めてで、関東地方でも稀であるという。年代は五世紀中葉から後半と推定され、畿内政権との強い関係を示している。

それにしても、これらのはにわはどこで作られたのであろうか。その場所はそのなかに遠くない筈である。いずれ近くの丘陵で「はにわ窯跡」がきつと見つかることがない。

県立考古資料館

運営協議会

委員 きまると

運営協議会は、資料の収集、

保管・展示や企画展、特別展の

開催、普及啓蒙活動などを協議

する機関で、次の七名の方々に

構成され、任期は二年である。

委員長 浜田 清明

(山形県文化財保護協

会常任理事、元県教委

文化課長)

副委員長 吉野 智雄

(元県立博物館学芸課

長、山形市野草園)

委員 菅井敬一郎

(理学博士、岩石学者)

山崎 正

(高島町立郷土資料館

館長)

安孫子好重

(山形城北女子高講師、

山形県文化財保護協会

常任理事)

佐藤 鎮雄

(南陽市立漆山中学校

教諭、日本考古学協会

会員)

木村 琢美

(山形県博物館協議会

副会長、米沢市教委文

化課長)